

「日中友好」の基礎を築く—天津日本人学校における実践

前天津日本人学校 教頭

北海道札幌市立屯田北小学校 教頭 小松 裕和

キーワード：在外教育施設、天津、日中友好、国際理解教育

1. はじめに

世界の経済大国となった中国では、住宅や自動車、高級衣料品に至るまで人々の購買意欲は旺盛であり、至る所に物が溢れている。国民の所得も年々上昇を続け、現在の天津市における最低賃金も月額3,000円を超えるようになってきた。このような経済成長に伴い、生活様式も変化し、若者の近代化が進み、ファッションや嗜好では欧米と遜色がないくらいに発展している。日本との関係については、民間交流も盛んに行われ、2国間の関係性も大幅に改善されてきたことから、日本に対するイメージも良くなっている。

2. 日本人学校における日中交流の取り組み

(1) 日本に対する意識の改善

日本の言論NPOと中国国際出版集団が2018年9月に発表した両国間の意識調査によると、中国人の日本に対する好感度が大幅に改善された。その内容を見ると、日本に対してよい印象をもつ割合が4割以上となり、悪い印象をもつ割合も6割にまで減少している。これに対し、日本の中国への印象は、多少改善は見られるものの大きな変化は見られない。

この点については、2つの要因が考えられる。まず、中国の世界戦略に対して不安を抱く諸外国が増え、国際情勢が微妙になったことで、日本との関係を改善しようとする中国政府の動きが背景にある。そのため、最近のニュースでは日本を非難する声明や映像等が極端に少なくなり、首相訪問時には日本国旗を背景にした映像まで放映された。

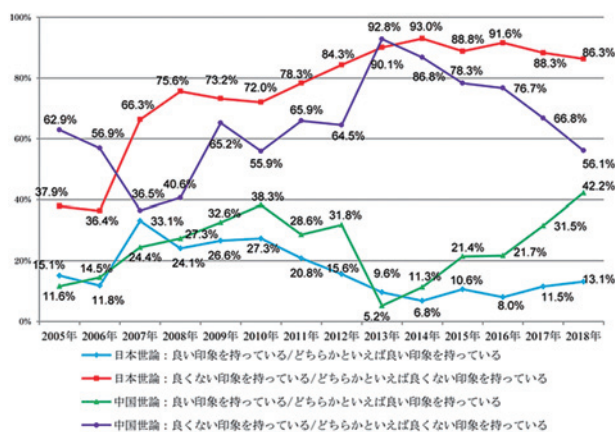
また、日本への旅行についても規制が緩和されているため、多様な旅行企画が販売され、多くの中国人が訪日している。半面、韓国などは早期防衛システムサードを巡る問題の対立をきっかけに、団体旅行が規制され、訪韓客が激減したり、韓国製品の不買運動に発展したりする現象が見られた。このように、国家の政策を背景に、経済活動や情報の管制が厳しく統制される中国においては、国民の意思も国家に左右されることがあるが、その中でも私たち日本人を受け入れ、しっかりと未来志向で交流を続けていただける団体や学校があることに感謝したい。

(2) 学校を取り巻く環境

本校は、1996年天津日本人補習授業校から始まった。初代校長によると、児童生徒数も少なく、教職員も派遣されていない中で、開校準備をすることには大変な苦勞があったようである。特に場所の選定については、賃料や児童生徒数、通学経路や児童生徒の安全確保等日系企業の全面的な協力の下、ホテルの1室を間借りする形で開校することができた。

その後、日系企業の進出に伴い、児童生徒数も大幅に増え、教室等が不足してきたことから1999年全日制教育

【相手国に対する印象】



を実施する天津日本人学校として新たな場所を選定し、開校するに至った。この時の学校の選定についても、当時の学校運営理事会をはじめ、天津日本人会の協力を得ながら選定に努めてきたようであるが、次のような制度の問題等もあり、相当難航していたようである。

<制度上の課題>

1. これまで土地や建物の個人所有を認めていなかったが、改革開放を打ち出してからその規制が緩和されてきた。しかし、中国内でも初めてのことであり、どの程度認められるかが不透明な状況があった。
2. 外国企業の出資比率に制限が設けられているため貸主の信頼度（契約期間や賃料、条件等の順守）に不安がある。
3. 児童生徒数に対する賃料の比率が高い。
4. 天津以外の地域では反日感情が高まると、デモ等も行われるため、地域の状況は重要な要素となっている。

このような状況の中で、日系企業が設立した日本人向け住宅を提供していただけることになり、晴れて日本人学校として開校できたのである。

(3) 中国文化体験

天津日本人学校では、「磨かれた国際感覚を持つ子」を目指し、開校以来現地理解教育に取り組んでいる。主な取り組みとしては、以下の3つとなる。

○言語教育

小学部1年から中学部3年まで週1回の中国語学習を実施している。以前は、中国内で販売されている言語教材を使用していた時期もあったが、ここ数年は現地中国語学校の協力を得ながら学習に取り組んでいる。平成30年度からは、新学習指導要領の完全実施に向け、英語教育の充実も求められることから、これまでの英語学習をベースにした中国語学習のカリキュラム作成に取り組み始めた。また、これまでは、中国語指導に当たる教員は政府派遣教員が担当していたが、中国人スタッフの教員免許をもっている人材を活用することで、経費削減をしながら内容の伴ったカリキュラム作りに取り組むことができるようになった。

○異文化体験

中国には、地域によって様々な文化が存在しているため、どのような体験をさせるかということは大きな課題でもある。

天津日本人学校では、大きく2つの体験に取り組んでいる。その1つは、学校内で取り組む体験活動である。体験活動は、総合的な学習の時間に位置付けられ、小学部3年から小学部6年までの子どもたちが取り組んでいる。これらの取り組みは、天津市教育委員会や日中友好協会等からの紹介を基に、天津市に在住する職人さんや芸術家の方を学校にお招きし、直接子どもたちへ指導していただけることをコンセプトに取り組んでいる。

平成30年度は、小学部3年生は、天津市を代表する「泥人形」作り、小学部4年生は中国全土で見られる「箭紙」、小学部5年生は「農民画」、小学部6年生は「花文字」に取り組み、中国文化の奥の深さや伝統文化に関わる人達の心情に触れることができる有意義な時間を創り出している。また、これまでは年1回の活動であったため、年数回学校へ来ていただき、年間を通して作品を創り上げるような活動に発展させることを目指している。



花文字の体験学習

2つ目の体験活動としては、修学旅行等における体験活動である。これまでの活動では、海外ということもあり、「体験」よりは「見学」中心の活動が多く組まれていた。そこで、小中一貫教育の柱となっている「国際理解教育」の良さを生かし、小学部1・2年は生活科を中心に、身近な学校周辺地域にある市場等の施設を



成都パンダ基地での体験学習

生かし、言語教育で培った中国語を使いながら交流する場を設けるようにした。小学部3年生以上は、「中国文化体験」を中心にしながら、クラブにも中国文化体験クラブ等を設け、年間を通した体験活動ができるように改善をしている。さらに、小学部5・6年と中学部からは宿泊学習や修学旅行に際して、現地でしか体験できない活動を旅行者にも提案してもらいながら学習へとつなげることができた。

○交流活動

天津市には、インターナショナルスクールが4校（韓国国際学校、TIS（Tianjin International School）、TSI（International School Tianjin）、日本人学校）が登録されている。開校当初は、日本人学校の児童生徒数も少なかったことからインターナショナルとの交流は難しかったようであるが、文化交流ということで徐々にいろいろな学校と交流ができるようになってきた。最近では、学校に隣接するTIS（天津インターナショナルスクール）と小学部5年生以上の児童生徒が交流を続けている。子どもたちは、英語教育の中で、学校紹介のプレゼンや催し物の紹介等の話し方を学習し、たくさんの国籍の子どもたちと交流をすることができている。

また、現地の公立学校との交流については、年1回の交流デイを設け、お互いの文化を紹介し合いながら交流を深めてきたが、交流先の選定にあたっては区教育委員会に紹介をいただいたり、中国人スタッフの人脈を活用したりしながら探している。ただ、現地の学校は、児童生徒数が1,000人以上の学校が多く、交流させる児童生徒の選定や学年、行事等の様々な事情から断られることも多くある。

○日中国交正常化40周年、開校20周年記念イベント

天津日本人学校は、平成30年に開校20周年を迎えることができた。また、この年は日中友好条約締結40周年とも重なることから子どもたちの心に響く周年行事を企画した。

この企画の当初は、日本から音楽家を呼ぶことや講演会を開くことなども検討されたが、イベント企画のコンセプトを「子ども中心のイベント」ということで、これまでの発想とは大きく転換し、学校で開催していた学習発表会を学校外の場所で開催することにした。また、本校の児童生徒の発表だけではなく、中国の子どもたちからの発表の場を設け、日中友好のシンボルとしたいと考え、発表会場や参加できる子どもたちの選定に着手した。場所の選定では、10か所近く視察し、学習発表会にふさわしい「天津音楽堂」という歴史ある会場で発表できる段取りを整えた。また、中国側の参加していただける学校についても、その年の春まで本校に在籍していた生徒が通う現地校が快く引き受けていただき、中国の伝統音楽を発表することになった。当日は、天津市政府関係者、日本人会理事の方々、保護者や歴代の校長先生方にも参加をしていただくことができ、子どもたちが半年かけて練習を積み重ねてきた歌や器楽の演奏を聴いていただいた。また、セレモニーの最初には、よさこいと和太鼓をコラボした演奏を披露し、中国側の発表の後には、日中生徒代表による「友好宣言」を発表することができた。

このイベントの中で、中国側関係者が一番驚いたことは、本校の児童生徒が中国国歌を斉唱できたことである。本校は、これまで中国国歌演奏に際しては、姿勢を正して聴くに留まっていたが、このイベントを機にお互いの国を尊重すること、敬意を払うことを問うたとき、子どもたちからも国歌を歌うことが提案され、中国語の学習の中でも意味を学習しながら素晴らしい歌声を響かせることができた。

3. おわりに

天津日本人学校には、在籍児童生徒の二重国籍問題（中国政府は二重国籍を認めていない）や学校再契約・移転等の問題もあり、学校経営に直結する課題が山積していた。これらの課題については、天津市政府をはじめ、多くの方々の多方面にわたるご理解とご協力が必要である。そのために学校としてできることは、日中友好を体

現化し、お互いの文化や風習を尊重し合える場をどのように創っていくかである。

このような姿勢が学校の長い歴史の中で脈々と受け継がれ、現在に引き継がれていることは、本当に素晴らしいことであると肌身に感じる事ができた。また、このような姿勢は天津市政府をはじめ、教育委員会、現地校の校長先生方にも評価をいただいていることは大きな力となっている。

子どもたちには、学校で学んだ国際理解教育を基に、これからの日中友好の懸け橋になっていくことを期待している。